

<3つの視点>

フォトジャーナリスト

桜井和馬氏

「一日を愛し、
一年を暮し、
4年に想いを馳せる。」

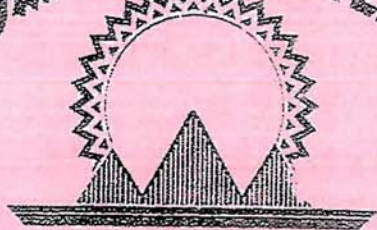
「一日は、身近な関係や
コミュニティと大関わり。
「一年は、社会や国の情勢を
考える視点。
「4年」の視点とは人間や
生きとし生けるものを含み
地球環境の視点。(中外日報HPより)

※ 桜井和馬著『妻と最期の10日間』集英社新書。

山陽堂だより 46

2013年5月奉月

SANYO DO SHOTEN



山陽堂書店

03-3401-1309

1945年5月25日

昭和20年

青山・表参道周辺を

含む山の一角は

空襲を受け焼け野原

になりました。

この日、善光寺さん

本堂で、13時から

法要があります。

「風の旅人」で連載されて

いたとき、31歳にやがて

に12歳を過ぎました。

G.N. は
ギャラリー・トコロの引当です。

しごととわたしたち展

企画: しごととわたし ギャラリー山陽堂

会期: 2013年5月10日(金)~5月24日(金)

場所: ギャラリー山陽堂

開廊時間: 平日 11:00~19:00 土 11:00~17:00 日・祝日休み

(5/18 土の12時~14時30分はトークのため閉廊しています)

女性の人生にはしてもいいし、しなくてもいいことがたくさんある。

例えば、仕事や家事、恋愛、結婚、出産、

いつまでも美しく、健やかであろうと心がけることなんかも。

そんなふうに変化が多い分、楽しさも喜びもあるけれど、

わからなさを抱える場面もきつと少なくない。

私たちの周りに溢れている情報が提示するある種の答え。

それらをもっと根本から見つめなおしたり、新しく拾い集めたり、

ときには放ってみたりして、ひとつひとつ探っていきたい。

2012年4月に創刊したフリーペーパー『しごととわたし』。

毎月ひとりの女性にインタビューし、それぞれの答えを記録してきました。

職業や年齢、パートナーや子供の有無までバラバラな12人の女性たち。

彼女たちにとって、仕事って? 女性って?

今回は、『しごととわたし展』と題し、2フロアを使ってこの1年間の活動を振り返ります。

2階では、全バックナンバーに加え、取材の背景を新たに追記したものを、

3階では私たち制作メンバーの仕事も展示します。

仕事から女性の人生を、女性の人生から仕事を考えるきっかけになれば幸いです。

5/1(土)は キンサの編集長

中島敏子さんを天迎えして!

5/8(土)は、写真の岩本良介さん

アート・プロジェクト・セッション

担当 柏岡一樹さん

そして、インク・と編集

担当の橋山ひろみさん

とのトーク。(「しごととわたし」

各々のトークに参加してくれた

人たちに、なんとも熱い

ものを感じてきて。

みんな考えてるんだな。

「これだ!」という

答えはない中で、もかい?

なんもって

やってるんだな。

と思った。

G.N. 肩の力を抜きながら、自分と仕事のこと
考える空間にめぐりあえて、とても満足です。

G.N. 共感できる気持ちか
たくさんあり、
救われた。

G.N.

育児の最中、仕事との関係

夫のふせ話(←これは他)

よもいっそ悩んでいいです

もう何もできない人じゃあいかと

本に集中してるうち

ワタシ、すごいな

重たくなってる

雨の日
天気も心もわりわり
天気が前へ進み出す

『こころ朗うたれ、誰もみない』

タタシユン版画展 2013.3.27(水)～4.13(土)

「またか、はん画、できるなんて！ かんけきです！ たのしかったです！
また やりたーい！」(小学4年生がキャリポートに残した言葉)
タタさんが在廊してくださった数日、タタさんはキャリーと言わ
れてた方たちというには、紙版画をつくってくれた。タタさん
の指導のもと、力作続出。はじめての方だったのに！
会期中、『コヨーテの旅、編集者の想い』コヨーテ・スリット編集長
新井敏記さんと新潮社編集者 寺島哲也さんによる山陽堂エディ
ターストークを開催。このお話の中で思いがけぬことを知った。
今はなき山陽堂 須田親父の記憶から、新井敏記さんの中に
残っていたのだ。今から30年前、新井さんは「ISSUE」という直販
雑誌をつくっており、都内の置いていると思う本屋10店を南北と
リストアップして一軒一軒まわったという。そのとき、今はない吉祥寺駅前
の本屋と山陽堂の親父に説教をされたそう。

「つかうのか？ つぶすなよ。」

そのとき、新井さんは、ちゃんと雑誌を出そうと思ったと言っ
てくれた。うれしかった。今はなきあの須田親父もようこんでいる
だろう。

二回めのトークは、「こころ朗うたれ、誰もみない」アメリカ文学の
翻訳家、エッセイスト、文芸雑誌「モンキー・ビジネス」の編集責任者を務め
られた柴田元幸さんとイラストレータータタシユンさんのイベント。
柴田さんの口調のような(参加者の方から言いました)朗読に合わせ、
タタさんから版画を制作していく様子、その朗読された内容と
出来あがった作品のイメージが、ビジュアルとあっていて圧巻。

「80になっても感動する心があるっていうことは、生きて
よかった。」

お二人のトークに参加した人が言っていた。

リズム感のある言葉で語られると感動が広がる。抑揚のある言葉で
語られるとじんじんする。手で読むこと、目で見ること、目で聞くこと、
それとちかう感覚が、ということを確認したそう。

「感動があること、それは希望につながっている。」

大切なことを気づかせてくれた、スリット・イン・アライザンさんとの
共同企画展だった。

1000(税込)

TOKYO LITERARY CITY 読者のための文学部
村上春樹と村上春樹の20年 浦沢直樹と村上春樹